

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般 - 84

学校名・団体名	五條市立北宇智小学校
HPアドレス	<a href="http://www.gojo-nar.ed.jp/kitasho/">http://www.gojo-nar.ed.jp/kitasho/</a>
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	ドラムサークルで心を紡ごう ～心を紡ごう 内へ 外へ～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>参加者が輪になり、ハンドドラムや打楽器を鳴らすドラムサークル（以下DC）。2年前、職員研修から始めたDCは、昨年度は子どもたちのコミュニケーションづくりや居場所づくりを目的として実施した。そのときの子どもに対するアンケート調査から、DCは特にストレス、アサーティブネス、自尊感情に有効に働くことが分かってきた。</p> <p>さらに今年度は、DCを総合的な学習のカリキュラムに組み込むことで、その成果の向上や広がりを見ることができないかと、企画・実施することにした。これまでとは違い、ゴールを設定した新しいカテゴリーのDCに取り組んだりファシリテーターとしての挑戦をしたりする子どもの成長に、「心を紡ぐ」ことへの可能性を見いだすことができるのだろうか。</p>	

## 1. 北宇智小学校の子ども像と課題

本校児童の多くが、核家族や両親共働きあるいは複雑な家庭環境という状況の中で育っている。そのために親に存分にかまってもらえず、抱えているストレスが十分に癒やされることのできない子が少なからずいる。このような子どもが集まる教室では、クラスメート間でトラブルが生じやすくなったり、それが教師との間の摩擦にまで発展したりすることもある。本校では教室での過ごしやすさを客観的に測定できる Q-U という検査を定期的に行っているが、そこにも自分の居場所を探せずにストレスを抱えている子の姿を観ることができる。

これまでも、クラスメートとの関係を作っていくための学習を積み重ねてきたが、目に見えて好転したとは言い難かった。その理由として、子どもが低学力傾向にあるとともに、それに起因して自己を開示し自分の思いや考えを伝えたり表現したりする力、他者の気持ちや状況を想像したり把握したりすることのできる力などが十分だとは言えないことがあげられよう。

これらのことから、子どもたちに「心を紡ぐ」経験を積んでいくことが必要であろうと考えた。キーワードとした「紡ぐ」には「綿または繭の繊維を引き出し、撚りをかけて糸にする。」という意味がある。このように、子ども個々の思いや気持ちを注意深く引き出し、一本の思いに丁寧に撚り合わせていくことを課題として設定した。

現 6 年生 (20 名) は、1 年と 4 年の時に子どもたち同士あるいは担任との間にトラブルが起き、それに保護者も巻き込む形で大きな問題に発展した。特に 2 年前の 4 年時には学級が機能しなくなり、何人も教師や補助員が教室に入ることを余儀なくさせた。

このような子どもたちも現担任の努力の甲斐あって平静を取り戻してきたが、これに大きく関わった要素の一つとして、2 年前より取り組みを開始した「ドラムサークル」があげられよう。これより、「心を紡ぐ」を具現化する「ドラムサークル」とは何かについて述べていきたい。

## 2. 状況乗り越えるために

現状を乗り越え課題に迫るためには、どの子にもわかりやすく取り組みやすい手立てが必要となる。それには、ノンバーバルコミュニケーションの一つとされるドラムサークルがふさわしいのではないかと考えた。

ドラムサークルとは、参加者が輪になり輪の中にあるファシリテーターの指示に従って、太鼓などの打楽器を即興演奏していく活動であり、次のような特徴がある。

- ・ドラムサークルには、「間違い」という概念がなく、すべての個性を受け入れる。
- ・ドラムサークルの効果として「笑顔や、やる気を引き出し、協力し合う姿勢や団結力を高め、リフレッシュやレクリエーションなどの様々な効果も期待できる…」

とされている。「(はじめてのドラムサークル): 音楽之友社より)

こうしてみると、ドラムサークルは、本校が持つ課題を突破することができる格好の教育的活動だと言えよう。

## 3. ドラムサークル① (2015 年度)

### (1) ドラムサークルを始める

子どもたちにとって初めてのドラムサークルは、2015 年 10 月 22 日に実施した「人権教育講演会」においてである。「ドラムサークル&アフリカンライブ」と称して参加型・体感型の講演会を実施した。初めてのドラムサークルやアフリカンネイティブの音楽は、子どもたちには鮮烈な印象として残ったようであった。また、保護者も一緒に楽器を鳴らしたりライブを楽しんだりし、好印象を持って受け入れられた。

続いて 12 月 1 日~3 日には、ドラムサークル・ウィークと称して、3 日間のワークショップを実施した。特に、高学年 (5 年 6 年) の子どもたちにはファシリテーションをも学ぶ時間も設定した。これは最終的に、子どもがファシリテーターになってドラムサークルを実施することを想定したからである。また、教職員の研修も同時に実施し、学級活動や音楽の時間へドラムサークルの導入を図ろうとした。

この 3 日間で、全校の子どもがドラムサークルを楽しみ、多くの子どもがファシリテーションにまで興味を持った。太鼓を鳴らしてリズムのやり取りを楽しんだり内在するエネルギーをファシリテーションと言う形で表に出したりしながら、自己を成長させていく場面に幾度となく出会うことができた。特に前述の現 6 年生 (当時 5 年生) の子どもたちに、そのような姿を見ることができたのは大きな収穫であった。

### (2) ドラムサークルの有効性

一連のドラムサークルの前後で、ストレスやアサーション、自尊感情におけるアンケート調査 (奈良教育大学 櫻井恵子による) を行った。それによると、ストレスについては高学年になるに従って有効、アサーションについては多くの学年で有効、自尊感情については高学年で有効、という結果が出ている。

これらのことから、ドラムサークルを単発的なイベントに終わらせるのではなく、本校の教育活動に根付かせたいと考えた。継続的に実施することで、子どもたちの手でドラムサークルが行えるようになる。そうする中で、子どもたちのアサーションや自尊感情などが向上し、それに対してストレス度が下がる。こうして、学級はルールが内在する穏やかで意欲的な集団として育っていくであろう。

## 4. ドラムサークル② (2016 年度 「ちゅうでん教育助成」に関わる取り組み)

### (1) 平和学習とドラムサークル

2015 年度のドラムサークル・ウィークでファシリテーションを経験した子どもが現 6 年生になったので、彼らを中心に据えてドラムサークルをさらに推し進めたいと考えた。学年枠を取り払った縦割りグループ「ハッピーグループ」による遊び時間「ハッピータイム」、音楽や学活での学習時間において、ドラムサークルが日常的になることは昨年度からの最終的な目標である。さらに本年度は、長いスパンの学習活動にドラムサークルを位置づけることをもう一つの目標に定め、よりいっそう教育的価値のある取り組みを創造したいと考えた。

具体的には、6 年生の総合的な学習の時間に行う「平和学習」にドラムサークルを組み入れることで、本校児童のみならず保護者や地域をも巻き込みながら、一方では子どもたち自身の内面的な平和、もう一方では難民問題などを代表とする国際的な平和に意識を向けさせられると想定した。こうして、「ドラムサークルで心を紡ごう ~心を紡ごう 内へ 外へ~」をテーマとし、その実践のスタートを切った。

ただし筆者自身が 6 年生の指導に直接的に関われないので、6 年の学級担任にゴールまでの道筋を示し相談しながらこの取り組みを進めていくことにした。なお一連の取り組みのコンテンツともなる、広島への修学旅行 (5 月)、平和集会 (7 月)、難民救済のための服のチカラプロジェクト (主に 10 月~11 月) については、6 年主体の取り組みになるのでここには記していない。

### (2) 人権教育講演会 (2016 年 10 月 20 日実施)

2015 年度に実施した「ドラムサークル&アフリカンライブ」では、子どもたちの反応が素晴らしく参加した保護者からも高い評価を得ることができた。子どもや保護者の「今年も…」の声に押されて、年度初めには本年度の実施を決定していた。前回は 3 学年ずつの 2 回講演としたが、今回は全校児童対象に 1 回講演とし、十分に楽しめる時間を確保した。

この人権講演会や後に記すドラムサークル・ウィークに先立ち、その下地を整えようとして次のようなことを行ってきた。

まず、6 月に本校で、ドラムサークルの父と言われるアーサー・ハル氏を招いてドラムサークルを行うイベントを開催した。またそのイベント前日や 9 月初めには、12 月のドラムサークル・ウィークの講師三原典子氏を招いて高学年中心にドラムサークルの授業を行った。

次に、この講演会を見据えて、アフリカンライブで演奏される歌「ジャンボ・ブワナ」を 9 月初めから全校児童が覚えることにした。校内放送で流したり音楽の時間に練習したり、さらに運動会の高学年による組立体操に使ったり市内の小学校中学校音楽会での演奏曲としたりした。

こうして、10 月 20 日には全 90 分の「ドラムサークル&アフリカンライブ」を実施した。まず前半、全校児童に保護者や地域の人を含む総勢約 200 名によるドラムサークルを、DeCca (関西ドラムサークル) のスタッフがファシリテートして行った。ここで数人の 6 年生の子どもにも簡単なファシリテートを行う機会を与え、後にこの規模のドラムサークルをファシリテートするための布石とした。

後半のアフリカンライブでは、ケニア出身のミュージシャンによる音楽を聴くだけではなく、既に子どもにはおなじみの曲になっているジャンボ・ブワナを歌ったり踊ったりした。ドラムサークルでほぐれた心を”なかま”で「内へ」つむぎ、その”なかま”はアフリカンライブで自分とは違った世界「外へ」と新しい糸をつむぎ足そうとしていた。まさに、キャッチフレーズ「体感する人権教育講演会」そのものであった。

平行して6年生による「服のチカラプロジェクト」も本格化する時期であったが、アフリカンライブにおけるケニアの子どもの話や「もの」で支援するときの気持や態度の話は、これから難民に送る服を集めていこうとしている子どもの心に深く響くことになった。

### (3) ドラムサークル・ウィーク (2016年11月30日～12月2日実施:「ちゅうでん教育助成」に直接関わる部分)

これまでの本校の平和学習は、ひとつの明確なゴールに向かって年間のそれぞれの学習や活動が系統的に計画実施されてきたとは言い難い。それに対して、今年度はドラムサークル・ウィークの全校ドラムサークルをゴールに設定し、修学旅行、平和集会、服のチカラプロジェクト、人権教育講演会、小中音楽会などを、有機的に系統づけた長期にわたるプロジェクト学習となるよう計画した。

その最終的なゴールは、子どもたちの手で企画し実施する全校ドラムサークルである。ストレスやアサーション、自尊感情に効果的に働きかけ、「笑顔や、やる気を引き出し、協力し合う姿勢や団結力を高め…」とされるドラムサークルは、平和学習のゴールにふさわしい。さらに、今回の全校ドラムサークルは、子どもたちによる能動的な学習(アクティブ・ラーニング)として計画することにした。

ドラムサークル・ウィークは、実質3日間、期間は11月30日(水)～12月2日(金)、その大まかなプログラムは次の通りである。

- ・11月30日…「平和」をテーマにした全校ドラムサークルのイメージを作ろう。
- ・12月1日…イメージにファシリテーションキュー(指示)を当てはめていこう。
  - ・ファシリテーションの練習をしよう。
- ・12月2日…「平和」をテーマに全校ドラムサークルを開こう。



この大枠に基づき、6年担任と相談しながら具体的な授業イメージを作り、担任が授業に当たった。

- ①子どもたちの「平和」をテーマにしたドラムサークルのイメージをとらえる。
  - ・平和をイメージするキーワードを出し合いイメージマップにする。
  - ・出てきたキーワードをいくつかのまとまりに分類する。
    - ・笑顔
    - ・つながり
    - ・明暗
- ②分類項目をドラムサークルの流れを考え順番を決める。
  - ・どのように流れると、自分達が言いたいことが伝わるのか。
    1. つながり
    2. 明暗
    3. 笑顔
- ③分類項目ごとのグループに分かれ、伝えたい項目ごとにどのファシリテーションを割り当てるのかを考える。
  - ・ファシリテーションの流れをよく考える。
  - ・1人で難しい場合は、複数でファシリテーションをする。
- ④できあがったファシリテーションの流れにもとづいて、グループごとに練習をしていく。
  - ・自分のファシリテーションをよりうまく伝えるにはどうすればいいのか。
  - ・全体の流れを想定しながら、ファシリテーションを行う。

昨年来の取り組みより、6年生はファシリテーションへの不安より全体を自分たちでやり通すことへの不安の方が大きいようであった。

### (4) 平和へのドラムサークル

さて、12月2日(金)全校ドラムサークル当日。1時間目より5年6年で、体育館に椅子や楽器の準備を行った。

そして6年生は、持っている不安を解消したいと、2時間目にはリハーサルをはじめた。椅子だけの大きなサークルに入り、ファシリテーションの感覚をつかんでいく。講師スタッフのアドバイスを咀嚼しながら、準備したファシリテーションを確かめていく。自分の思いを乗せるファシリテーションを他学年の子どもたちがうまく受け取り、彼らが思い描いたような空間を創り出せるのだろうか。少しずつ自信を重ねながら、それでもまだ残る不安を消し去ろうとしている。

3時間目、本番の時がやってきた。全校の子どもたちが順番に体育館に入り席に着くと、ドラムコールが始まった。参加者の中には、何人も保護者の顔が見える。スタッフによるウォーミングアップの後、ファシリテーションのバトンは、いよいよ6年生の子どもたちに渡された。

最初は、「つながり」グループからのファシリテーションだ。このグループの最大のポイントは手をつなぎ合ってサークルを作り上げること。その独創的なアイデアをうまくファシリテートできるのだろうか。最初は、何をやるのかを理解できなかった参加者も、他の6年生の協力のおかげで徐々に手をつなぎ始め、最後には何重もの大きなサークルができあがった。

次は、「明暗」グループ。こちらは、戦争の暗い部分から明るい未来への進展を表現するという。音を順番に止めたり、サークルを半分に分割して演奏するパートを移動させたり、テンポアップしたりとかなり高度なファシリテーションが必要になる。それらを見事にやりきった子どもの満足感あふれる顔が印象的だった。

最後は、「笑顔」グループによるファイナル・ファシリテーションである。とにかく参加者を笑顔にさせようと、連発されるアップ&ダウンやコール&レスポンス。そして、おどけた調子で鶏の形態模写ファシリテート。最後には最大限にランブル(乱打)を要求したあと、6年生が全員でサークルを取り囲むように移動し、「1, 2, 3, 4, ストップ」心地良い余韻の後、全体が一体感と笑顔でいっぱいになった瞬間だった。

### 5. ドラムサークルで「心を紡ぐ」ことはできたのか

「達成感」「乗り越えた」「自信」「楽しい」「気持ちいい」「ドキドキ」「ワクワク」など、6年生の感想文にはこのような言葉があふれている。「友だち」「つながり」「笑顔」「平和」「伝える」など、少数だが他者や目的を意識する感想も見られる。その中に、次のような感想があった。「ファシリテータのときとでもはざかしかったけどみんながみんなを笑顔にしてくれと、ぼくも笑顔になりました。みんながしているすがたがとてもゆうきづけてくれました。ぼくははずかしかったあまりみんなを笑顔にできなかったけれど何人か笑顔にできたのでうれしかったです。とても今日のドラムサークルデーは楽しかったです。またドラムサークルを今日よりも楽しんでやりたいです。」(原文のまま)

これを書いたA君は、4年生のときに問題行動を起こした内の1人である。ブラジルにルーツを持つ彼は、自己を開示することが一番難しかった。その彼が、友だちの応援を意識しながら自分を奮い立たせ、他の子どもたちを笑顔にしたいと働きかけている。この文章を書けようになるまで彼が心を開いたことには大きな評価に値する。「心を紡ぐ」ことで相手も自分も笑顔にできたのだろう。

	自己評価・自己受容	関係の中での自己	自己主張・自己決定
6月	2.63	2.14	2.29
12月	1.63	1.43	1.86
差	1.00	0.71	0.43

※数値が低くなるほど良好

ドラムサークル・ウィーク直後の12月7日に、自尊感情のアンケートを行った。A君の結果を6月の同じアンケート結果と比較してみると、「自己評価・自己受容」「関係の中での自己」の部分で大きな成長が見られる。(資料参照)

また、他の多くの子の「達成感」や「自信」などの気持ちは何の脈絡もなく出てくるものではない。その感情を出させた要因は、ファシリテーションを通して他の子どもたちとの豊かな関わりが実現した、まさに「心を紡ぐ」ことができた結果であると想像できる。

他学年の子どもたちの感想の多くには、6年生のファシリテーションへの賞賛と自分が将来ファシリテーターになることへの期待が書かれていた。自分も将来ファシリテーターをやってみたいと思わせるほどの6年生の活躍、そしてそれによって楽しい時間を与えてくれたことを素直に喜ぶ声であったと思われる。これも「心を紡ぐ」ことができた結果だと言えよう。その中に、次のような感想があった。

「ドラムサークルで思ったことは、音楽をやっていることが平和だと思いました。そう思った理由は、親切にみんななれるし、明るくて楽しいからです。戦争がなくなるのも平和の一つですが、ぼくは楽しく音楽ができるのも平和だと思います。」(5年生:原文のまま)

このような感想が生まれてきたことから、これまでの一連の「平和学習」は「内へ 外へ」と、大きな成果があったことを確信する。

子どもたちの思いや気持ちが丁寧に紡がれて一本の美しく強い糸になるには、今後もたゆまない営みが必要である。今回の実践が、本校の子どもたちが大きく成長する足がかりになれば幸いである。